

1. 会議名 言語・文学委員会科学と日本語分科会（第24期・第5回）

2. 日時 令和元年12月7日（土）14時00分～16時00分

3. 会場 国立民族学博物館2階 応接室（部屋番号 2018）
（大阪府吹田市千里万博公園 10-1）

4. 参加者

木部暢子、才田いずみ、酒井邦嘉、鈴木泰

5. 議事録

（1）前回議事要旨の確認

（2）手話言語の多様性について

発題1（才田いずみ）「日本語音声言語の「雑談」のデータ化 手話言語データに学びたいこと」に関して

1、日本人コミュニティに日本語学習者が融け込むために必要な雑談能力の調査のために、音声だけでなく非言語的手段も記録した雑談をビデオ収録し、画像データとして公開することが望まれる。

2、雑談に頻繁に現れる「いいさし」や「ききかえし」の談話機能の理解とその適切な使い方の指導方向について議論された。

3、同時に複数話者間で行われる手話言語におけるターンの取り方は音声言語と異なる手話言語の特性として今後研究されるべきものであることが確認された。

発題2（酒井邦嘉）「脳科学の立場からの手話言語の価値とその多様性」に関して

1、手話言語には様々な誤解があり、オリジンはさまざまでありながら自然言語としての多様性があるにも関わらず、世界共通の手話表現（例「国際手話」）があるように錯覚するような一般社会の見方を正していく努力が要請される。表現形に多様性であろうとも、手話言語と音声言語は、どちらも自然言語の構造（普遍文法）を持つことに変わりはない。

2、世間には手話言語を言語として認めながら、その価値や音声言語との違いを肯定的に考えない風潮があり、SSLのような集会にも、手話が分からないという理由でそれに積極的

に参加できない人がいるので、手話言語の特徴的な面についてワークショップを前日に行なうなどの方策をとることの必要性について議論された。

3、脳科学の立場からすると、手話言語についても自然言語であるがゆえの、基本的な文法構造をもつものとして、音声言語と共通の神経基盤がある。このことは、数年前に実証された (Inubushi, T. & Sakai, K. L.: Functional and anatomical correlates of word-, sentence-, and discourse-level integration in sign language. *Front. Hum. Neurosci.* **7**, 681, 1-13)。

4、音声言語に対する手話言語のあつかい、および特殊教育や外国語教育をめぐる国の方針に混乱があるように見うけられるので、それぞれの特殊性をしっかりとおさえた方針の確立が必要である。

(3) SSLL2019(手話言語と音声言語に関する民博フェスタ 2019)

実行委員会との意見交換

SSLL の実行委員の菊澤律子氏、相良啓子氏 (国立民族学博物館) を交えて意見交換を行い、次のような意見が出された。これについて、今後、幅広い分野で検討する必要があることが確認された。

- ・音声言語研究者が手話言語の学会やシンポジウムにもっと参加する必要がある。
- ・そのためには、音声言語研究者向けの手話の基礎講義の時間を設ける等の工夫が必要である。
- ・ろう者が参加しやすいような工夫も必要である。たとえば、日本語での字幕の標示や資料の配付等。

(4) その他

特になし

(作成:鈴木:木部)